イザヤ書62－63章 「主の贖いの日」

1A 見捨てられない町 62
1B 沈黙しないエルサレム 1－7
1C 義と救いの輝き 1
2C 新しい名 2－7
2B 敵から贖われる民 8－12
2A 約束の地に来られる主 63
1B 復讐される主 1－6
2B イスラエルへの恵み 7－14
1C 豊かな恵み 7－10
2C モーセの日 11－14
3B 踏みつけられている今 15－19

本文

イザヤ書 62 章を開いてください。私たちは、主がエルサレムに戻ってこられて、主の栄光でエルサレムが輝いている幻を、前回、60 章で読みました。そこが私たち異邦人も行き着くところ、神の都です。さらに、メシアの働きで、貧しい者、囚われ人が解放されて、主が彼らを高く引き上げてくださるところも見ました。このようにして、エルサレムが回復し、主の民が回復します。

1A 見捨てられない町 62

そして 62 章は、この回復の時まで、主ご自身が決して見捨てない、黙っていることはないと宣言しているところから始まります。

1B 沈黙しないエルサレム 1－7

1C 義と救いの輝き 1

1 シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために沈黙はしない。その義が明るく光を放ち、その救いが、たいまつのように燃えるまでは。

前回、62 章 10 節にある言葉、「私は主にあって大いに楽しみ」という言葉から始まる、「私」は誰であるか議論があることをお話ししました。いろいろな意見がある中の一つが、メシアご自身で会はないか？ということです。主の民と一つになって、救いの衣を着て、正義の外套をまとわせ、栄冠をまとわせていると宣言しています。

その時が来るまで、「わたしは黙っていない」とここで言われています。つまり、主のしもべ、メシ

アご自身が、エルサレムのために黙っていない、沈黙しないと言われていると、受け止められます。義が明るく光を放つ、救いがたいまつのように燃えるという表現は、主の情熱を示しています。こうなる時まで、決してあきらめないという強い意思が見えます。

そこに至るまでは困難があります。希望を失いそうになるようなこともあります。しかし、それでもこの希望と夢について語り続け、その時が来るのを待っているのです。主を待ち望む、神の国を待ち望むとは、「いつか来るのだから、何もしないで待っていよう」というものではなく、その反対です。今日という日を、義と救いが達成されていない現状を悲しみながら、なおのこと希望を抱いて、忍耐して待っていく姿です。決してあきらめず、信じて生きていく姿です。

2C 新しい名 2－7

2 そのとき、国々はあなたの義を、すべての王があなたの栄光を見る。そのとき、あなたは新しい
名で呼ばれる。主の御口が名づける名で。3 あなたは主の手にある輝かしい冠となり、あなたの神
の手のひらにある 王のかぶり物となる。

主の義が明るくエルサレムに輝く時に、救いがたいまつのように燃える時には、国々がその義を、またすべての王がその栄光を見ます。イザヤは、何度も、何度も、エルサレムがイスラエルの民のものだけでなく、すべての国々、すべての王たちがやってきて、仕えるところであることを見せています。それはメシア、キリストの働きによるものです。私たちは霊的に、その御国の幻の中に入れられており、それゆえ、イスラエルのメシアであるイエスを、礼拝しているのです。

そして、「あなたは新しい名で呼ばれる」と預言しています。主は、ご自身との関係を刷新される時に、新しい名を与えられます。アブラムには、アブラハムという新しい名を与えられました。ヤコブには、イスラエルという名を与えました。サウロには、パウロという直を与えられました。シモンには、ペテロという名を与えておられます。主は、ペルガモンの教会に対して、白い石を与え、「その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が記されている。」とあります（黙示3:17）。主が、ご自分とその者たちとの関係を新たにしてくださるのです。

4 あなたはもう、「見捨てられた」と言われず、あなたの土地は「荒れ果てている」とは言われない。
かえって、あなたは 「わたしの喜びは彼女にある」と呼ばれ、あなたの国は「夫のある国」と呼ば
れる。それは、主の喜びがあなたにあり、あなたの国が夫を得るからである。5 若い男が若い女の
夫となるように、 あなたの息子たちはあなたの夫となる。 花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神
はあなたを喜ぶ。

これらが新しい名です。「わたしの喜びは彼女にある」という名であり、「夫のある国」という名です。主がエルサレムを、見捨てられた女だったのが、夫のある妻のようにしてくださいます。その恵

みと麗しさのゆえに、ただ喜ばれます。主はゼパニヤによっても語られました。「ゼパ 3:17 あなたの神、【主】は、あなたのただ中にあって救いの勇士だ。主はあなたのことを大いに喜び、その愛によってあなたに安らぎを与え、高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」と。」

なんとすばらしいことでしょうか。女としてエルサレムをみなし、妻としてみなしておられるところに、主の優しさがあります、愛があります。人には、愛の保障が必要です。自分が愛され、守られているという安心が必要です。辱めを受けるとこから、守られる必要があります。これらを主が満たしてくださるのです。

エペソ 1 章 18 節で、パウロがこう書いています。「1:18 また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、」ここの訳ですが、「聖徒たちが受け継ぐものが」と訳されていますが、「聖徒たちにある遺産がどれほど栄光に富んだものか」と訳すことができます。つまり、どれだけ私たち聖徒が、主にとって貴いものなのかを示しています。畑で見つけた宝の喩えを、思い出してください。宝を見つけたら、全財産を使ってその畑を購入したのです。その宝が私たちで、その財産は、キリストご自身の人生すべてです！

6「エルサレムよ、わたしはあなたの城壁の上に見張り番を置いた。終日終夜、彼らは、一時も黙っていてはならない。思い起こしていただこうと主に求める者たちよ、休んではならない。7 主を休ませてはならない。主がエルサレムを堅く立て、この地の誉れとするまで。」

見張り番を置いて、黙っていてはならないと主は、言われます。主が、決して、義と救いが光るまで黙っておられないのです。ですから、その主の思いを与えられて、エルサレムについて、しっかりと見張る者たちが必要なのです。主イエスが、オリーブの山で、石が積み上げられたまま残ることはないと言われましたが、それから世の終わりに何が起こるかを語られました。特に、荒らす忌まわしい者が聖所に入るのを見たならば、ユダヤにいる者たちが荒野に逃げなければいけません。そのようにして、私たちは、主のことばについて、救いの完成に至ることばについて、じっくりと見ていくように命じられているのです。時を知る必要があります。

そして次に、主に求める者たちも休んではならないと、命じておられます。主を休ませてはならないという、ユニークな物言いをしておられます。それは、祈りのことです。主に願い、祈ることで、主がその祈りを聞いているようにしなさいということです。私たちは既に、天において、主の周りにいる長老たちが、香に満ちた金の鉢を持っているのを見ました。こうヨハネは書き記しています。「香は聖徒たちの祈りであった。(5:8)」祭司は、聖所の中で金の香壇で、その煙が垂れ幕の中に入り、宥めの蓋を覆うようにします。そうやって、聖徒たちの祈りも主の御座を覆うのです。これを、絶やしてはいけないということです。主の約束、ここでは、エルサレムが堅く立てられ、その地の誉れと

するまで、祈りを絶やすことはない、ということです。

2B　敵から贖われる民　８－１２

8 主は右の手と力強い腕によって誓われた。「わたしはあなたの穀物を　再び敵に食物として与えはしない。あなたが労して作った新しいぶどう酒を、異国の民が飲むことはない。9 取り入れをした者が、それを食べて主をほめたたえ、ぶどうを取り集めた者が、わたしの聖所の庭でそれを飲む。」

イスラエルの地が、絶えず敵によってその食物が奪い取られてきました。例えば、イスラエル人が育てた作物をミディアン人が収穫時に取り去ってしまうことが書かれていますが、あのギデオンが恐れて酒ぶねの中で脱穀の作業をしていました。しかし、今、それがなくなると言っています。

これは霊的にも同じです。私たちが、自分が主にあって行っていることが、敵の手によって奪われるようなことがあってはなりません。罪によって、敵が私たちにある霊的な尊厳が奪われないように、心も思いも守っていかないといけないです。そして、神の恵みがむだにならないようにするのです。パウロがコリントの人たちに言いました。「Ⅱコリ 6:1 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みを無駄に受けないようにしてください。」主にあって行ったことに、十分な報いがあります。その地道な、着実な道をしっかりと踏んでいくのです。

10 通れ、通れ、城門を。この民の道を整えよ。盛り上げ、土を盛り上げて、大路を造れ。石を除いて、もろもろの民の上に旗を揚げよ。

これは、エルサレムの都そのものが、用意しなさいと呼びかけているのです。城門もそうだし、遠くに住んでいる離散の民もそうです。彼らが帰還できるように、大路を造れと言っています。そして、イスラエルの旗も掲げよと言っています。なぜなら、主が来られようとしているからです。

11 見よ、主は地の果てに聞かせられた。「娘シオンに言え。『見よ、あなたの救いが来る。見よ、その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある』と。」12 彼らは、聖なる民、主に贖われた者と呼ばれ、あなたは、追い求められる者、見捨てられることのない都と呼ばれる。

主がエルサレムに来て、救いがあり、報いがあります。これまでの労苦に報いる慰めがあります。主イエスは、これをご自身を信じている者にも語られました。「黙 22:12 見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。」

そして、帰還してくる民に向かって、「聖なる民、主に贖われた者と呼ばれ」とあります。彼らが、離散の地では追い求められて、見捨てられます。今の、反ユダヤ主義が猛威を振るっている世において、これは現実味をますます増しています。しかし、主は、ご自身が戻ってこられる時に、彼ら

を贖い、聖なる民とされるのです。

2A 約束の地に来られる主 63

1B 復讐される主 1－6

そして 63 章です。主が、ご自身が来られる時に、エルサレムに来られる時に、敵どもに戦われることになりますが、その幻を示しています。

1「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」

主が、エドム、またエドムの首都であったボツラから来られる御姿です。なぜ、主がエドムの方から来られるのか？これは、モーセたちが荒野の旅で、まず主がシナイの山で天から降りて来られたことを思い出してください。そして、彼らがエドムの地を通ろうとしたけれども、エドムがそれを許さなかったので、迂回しました。そしてモアブの平原にまで行き、そこからヨルダン川を渡って約束の地に入りました。

主が来られる時、同じようにして戻られることが預言されています。ハバククの預言を読みますと、主の栄光が、パランの荒野から現れることが書いてあります。「ハバ 3:3 神はテマンから、聖なる方はパランの山から来られる。セラその威光は天をおおい、その賛美は地に満ちている。」シナイの荒野の北にパランの荒野があります。そこから来られますが、エドムのほうに行かれて、そこで戦われます。敵どもがそこに来ているからです。それからエドムからエルサレムの方に向かわれるというシナリオが、預言書から見て取ることができます。

黙示録 12 章には、イスラエルの残された者が、蛇の前を逃れて荒野に行くことが記されています。そこで蛇また竜が彼女を飲み干そうとするのですが、地が彼女を助けて、大水を飲み干したとあります。この荒野がボツラの辺り、今のヨルダンではないかと考えられます。イエス様は、このエドムの山地を「山」と言われて、エルサレムにいる者たちに逃げなさいと警告しておられます。「マタイ 24:15-16 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら――読者はよく理解せよ――ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」反キリストを中心にした全世界の軍隊は、荒野に逃れたイスラエルの民を完全に滅ぼそうと戦いに出ます。その逃げていくところが、エドムの都ボツラではないかと思われます。そこは今、ペトラという岩に囲まれた町で、ナバタイ王国の遺跡群になっています。そこは、人々が隠れるに適した、自然の要害です。しかし、彼らは滅ぼされそうになります。

その時に天から来られた再臨のイエスが、彼らに戦われます。そして戦いはエルサレムのほう

まで及びます。エルサレムに戻ってこられて世界の軍隊と戦う様子は、ゼカリヤの預言 14 章で見ることができます。この時の様子を、ここイザヤ書 63 章は描いているのです。

2「なぜ、あなたの装いは赤く、 衣はぶどう踏みをする者のようなのですか。」3「わたしはひとりでぶどう踏みをした。諸国の民のうちで、事をともにする者はだれもいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。彼らの血の滴りはわたしの衣にはねかかり、わたしの装いをすっかり汚してしまった。

黙示録 19 章の、再臨のイエスも、19 章 13 節に「その方は血に染まった衣をまとい」とあります。ここで主が説明されているように、返り血なのです。それを、ぶどう酒のために、酒ぶねで、ぶどうを踏みつけて、汁が出てくる様子です。

黙示録 14 章で次のように預言されています。「14:17-20 それから、もう一人の御使いが天の神殿から出て来たが、彼もまた、鋭い鎌を持っていた。18 すると、火をつかさどる権威を持つ別の御使いが祭壇から出て来て、鋭い鎌を持つ御使いに大声で呼びかけた。「あなたの鋭い鎌を送って、地のぶどうの房を刈り集めよ。ぶどうはすでに熟している。」19 御使いは地上に鎌を投げて、地のぶどうを刈り集め、神の憤りの大きな踏み場に投げ入れた。20 都の外にあるその踏み場でぶどうが踏まれた。すると、血がその踏み場から流れ出て、馬のくつわの高さに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。」都、つまりエルサレムの外で 1600 スタディオンつまり約 300 キロに、血の海が広がります。ボツラからエルサレムまでが、大体 30 ㌔です。黙示録 19 章には、再臨のイエスが、口から出る剣で軍隊に戦われますが、猛禽の宴会が始まり、主によって打たれた死体をそれらが食い漁ることが預言されています。

4 復讐の日がわたしの心のうちにあり、わたしの贖いの年が来たからだ。

主は、復讐をもって、つまり、イスラエルの民を滅ぼそうとし、神とメシアに反抗する者たちに対して、その悪に悪で報いられるのです。正しい裁きです。そのことによって、主がイスラエルの民を贖われ、また世界を贖われます。世に悪があれば、まだ贖われていません。この方のみが主となる時に、初めて贖いが完成するのです。

5 見回しても、助ける者はだれもなく、支える者がだれもいないことに唖然とした。それで、わたしの腕がわたしの救いとなり、わたしの憤り、それがわたしの支えとなった。6 わたしは怒って諸国の民を踏みつけ、わたしの憤りをもって彼らを酔わせ、彼らの血の滴りを地に流れさせた。」

主が来られる時に、だれも共に戦う者たちがいないとのことですが、黙示録 19 章を見ますと、戦わないですが、付いてきている者たちがいます。「黙 19:14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、

白い馬に乗って彼に従っていた。」白いきよい亜麻布を着ているのは、19 章前半を見ると、子羊との婚姻をしている人々、すなわち教会です！私たちは、戦われる主に付き従う者たちなのです。

2B イスラエルへの恵み 7－14

こうして主は、ご自分の御怒りを現し、それで彼らを救われます。そして神の国が建てられます。かつてイスラエルが、荒野の旅でシナイ山で主に会って、それから約束の地に入ったように、これからもそうしてくださるのだということです。古からある、主の恵みが次に書かれています。

1C 豊かな恵み 7－10

7 私は主の恵みを語り告げる。主の奇しいみわざの数々を。主が与えてくださったすべてのことを。
そのあわれみと豊かな恵みにしたがって 与えてくださった、イスラエルの家への 豊かな恵みを。

主が憐れみと、豊かな恵みによって報いてくださることを、ほめたたえています。私たちが、この豊かさに預かっていることを知る必要がありますね。そこに対する信仰を持ち、そして主をほめたたえていきたいです。「ロマ 9:16 ですから、これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」

8 主は言われた。「まことに、彼らはわたしの民、偽りのない子たちだ」と。 こうして主は彼らの救い
主になられた。9 彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、主の臨在の御使いが彼らを救った。
その愛とあわれみによって、主は彼らを贖い、昔からずっと彼らを背負い、担ってくださった。

これは、主がそのようにみなしておられる言葉です。イスラエルが荒野の旅をしている時に、多くの罪を犯しました。けれども、モアブの野で宿営をしている時、バラムがこのように預言しました。「民 23:21 ヤコブの中に不法は見出されず、イスラエルの中に邪悪さは見られない。彼らの神、【主】は彼らとともにおられ、王をたたえる声が彼らの中にある。」主が恵みによって、このように宣言しておられるのです！まさに、神の恵みによる義ですね。罪があるのに、それでも神ご自身の義によって、彼らを義とみなし、不法が見いだされないようにされているのです。私たちは、キリストの流される血によって、同じように恵みによって義とみなされています。

そこには、主の豊かな憐れみがあります。主は彼らと共におられました。そして苦しみを共にされました。一つとなってくださったのです。そして、彼らを苦境から贖い出し、彼らを背負われました。

10 しかし彼らは逆らって、 主の聖なる御霊を悲しませたので、 主は彼らの敵となり、自ら彼らと戦
われた。

主の聖なる御霊を悲しませたので、主が彼らを取り扱わなければいけなかったと言われます。

私たちも同じようなことをしてしまいます。聖霊を悲しませることができるのです。「エペソ 4:29-31 悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。むしろ、必要なときに、人の成長に役立つことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい。30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。31 無慈悲、憤り、怒り、怒号、ののしりなどを、一切の悪意とともに、すべて捨て去りなさい。」キリストの御霊は、赦しがあります。キリストが赦されたので、互いに赦し合うのです。ところが今、ここにあるように悪口を言い、苦みを抱き、憤りに満ちているならば、聖霊を悲しませているのです。

2C モーセの日 11－14

11 そのとき、主の民は いにしえのモーセの日を思い出した。彼らを、ご自分の群れの牧者たちとともに 海から導き上った方は、どこにおられるのか。その中に主の聖なる御霊を置いた方は、 どこにおられるのか。12 その輝かしい御腕をモーセの右に進ませ、彼らの前で水を分けて、永遠の名を成し、13 彼らに深みの底を 歩ませた方は、どこにおられるのか。荒野の中を行く馬のように、彼らはつまずくことはなかった。14 谷に下る家畜のように、主の御霊が彼らを憩わせた。このようにして、あなたはご自分の民を導き、 ご自分のために輝かしい名を成されました。

終わりの日に、主に立ち返ろうとするイスラエルの残りの民は、モーセの日を思い出します。ずっと、ずっと前の話です。はるか昔のことなので、今の自分たちとは関係がないように思われます。けれども彼らには信仰があります。古のモーセの日に生きておられた神は、今、私たちが信じる神と同じであるということを。力強いわざを行なわれた主、救いのわざを行なわれた主がおられました。そして同じ主が今もおられるのだ、と信じているのです。

私たちにとって、どうでしょうか？同じ信仰を持っているでしょうか？はるか昔のことだけれども、死んでよみがえられたキリストが、今も、同じように生きておられるのでしょうか？私たちは、そのことを信じているでしょうか？

3B 踏みつけられている今 15－19

15 どうか、天から見下ろし、ご覧ください。 あなたの聖なる輝かしい御住まいから。あなたの熱心と力あるわざは、どこにあるのでしょう。 私へのたぎる思いとあわれみを、あなたは抑えておられるのですか。

主は、聖なる御住まいにおられるという認識です。神は天に御座を持っておられる方です。かつて、天からシナイ山に降りて来てくださいました。今、残された民は患難の中で苦しんでいます。かつての憐れみを、主が敢えて抑えておられるのですか？と訴えています。

16 まことに、あなたは私たちの父です。たとえ、アブラハムが私たちを知らず、イスラエルが私たち

を認めなくても、 主よ、あなたは私たちの父です。 あなたの御名は、とこしえから「私たちの贖い主」。

主の、たぎる思いと憐れみは、天からのもの、聖なる御住まいからのものですから、それはモーセの日以前のものです。永遠の贖い主なのです。ですから、たとえアブラハムが自分たちを知らず、イスラエルが認めなかったとしても、主はご存知だということです。はるか昔の人たちと、自分たちにつながりがあるように見えなくとも、主は知っておられ、神は私たちの父であると訴えているのです。確かに、これは正しいです。私たちは、イエスの御名によって、この方はアブラハムがいる前から、「わたしはある」と宣言されたのですから、アブラハムを超えて、神が父となっています。

17 主よ。なぜあなたは 私たちをあなたの道から迷い出させ、私たちの心を頑なにして、あなたを恐れなくされるのですか。 あなたのしもべたち、あなたのゆずりの地の部族のために、どうかお帰りください。

これは、昔からずっと、先祖たちが頑なで、神を恐れなくなってしたことを回想しているのです。このような状態を、主が許されたから起こっているのだと言っています。ですから、長いこと神から離れていて、神につながることに連続性が見いだせなってきたのです。今のイスラエル人を見れば、多くが世俗で、神を信じていません。しかし今、残りの者たちが、主よ、どうかお帰りくださいと訴えているのです。

18 あなたの聖なる民がこの地を所有して間もなく、私たちの敵はあなたの聖所を踏みつけました。
19 私たちは、とこしえから、あなたに支配されたこともなく、御名で呼ばれたこともない者のようです。

敵に踏み荒らされて長い年月が経ちました。イスラエルに、ダビデのような王が立てられたのは、まるでなかったかのような状態ではないかと嘆いています。それは、確かにそうです。列王記や歴代誌にあるイスラエル王国の時代を除いては、異邦人の支配が続いていました。そして今、イスラエルは主権を持っていますが、その主権そのものを認めない勢力がおり、世界もそのようにみなす傾向が強いです。

それでも、主は、エルサレムにご自分の義が光、救いが照らされるまで、決して黙っていないというのが、62 章の冒頭の話でした。残りの民のうめきは、ある意味、私たちも、被造物と共にうめいているのです。「ロマ 8:22-23 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだが贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」